■■　狸の話（二話）　■■＝＝＝⇒三州横山話より

■　老婆を食い殺した狸　■

　字池代の大久保という山に住んでいた狸は全身白毛の古狸で、近くの深沢というところの路に出て、坊主に化けて人を嚇すなどと言いました。明治の初め頃、ここに近くの早川孫総という家で、老婆を一人留守において柴刈りに出かけたあとで、この狸が婆さんを食い殺して、山へ持って行ったと言いました。翌日山を探すと、婆さんの頭と肢が、離ればなれのところにあったのを拾ってきて埋めたなどど言いました。この老婆は眼が不自由で、いつも縁側に日向ぼっこをしていたそうです。

■　狸の腹鼓

　山へ仕事に行っていると、狸が呼ばると言って、たんたんと音がして、向かいの山で木を伐っては、ホイと呼ぶのに、うっかり返事をすると、それは狸だったので仕事を中止して帰ったなどと言いました。
　人間でいえば苦しそうな声で、ホーイと幽かに呼ぶとも言います。夜一人でいる時は、狸が呼ぶから、うっかり返事してはならないとも言いました。
　夜、狸と呼び交して、自在の茶釜を飲み干したとか、木魚を返事の代りに叩いて夜を明かしたなどの噺は、いつも聞いたものでした。
　狸の腹鼓は、月夜のものと言いますが、八名郡七郷村〔現、南設楽郡鳳来町〕の生田三省という人の実験した話によると、雨の降りそうな、真っ暗な夜、破れた太鼓でも敲くような音を時々させたと言います。もっともこれは檻の中に飼ってある狸だったそうですが、同じ男が、鳳来寺の山中で、雨夜に聞いた腹鼓も同じような音だったそうです。狸と貉とはちょっと見分けがつかないそうですが、冬は肢を見ればすぐわかると言います。狸の肢にはアカギレ（皹傷）が一面に切れていると言います。